巻頭言

那須野ヶ原の開拓事業を思い起こして

東洋建設株式会社
代表取締役社長　武澤　恭司

私は、海の仕事が多いマリコンに四〇年以上勤めていますが、実は海の無い栃木県の出身です。栃木県と言えば、世界遺産に登録されている日光や餃子の宇都宮といったイメージが強いかもしれませんが、苺や干瓢、もやしといった農作物は日本一の産出額を誇っています。また、韮や蕎麦、二条大麦などのほか、生乳も産出額が日本で二番目であるなど、意外に思われるほど農業がさかんな地域となっています。

しかしながら、栃木県の農業は古くから各地で行われてきたのではありません。県の北東部に位置する那須地区（那須野ヶ原）は、那珂川と箒川（ほうきがわ）に挟まれた約四万haにもおよぶ日本でも最大級の扇状地ですが、砂礫層が堆積した土地で農業に適さない土地でした。

稲作に理想とされる扇状地でありながら、砂礫層では水が地下に浸透してしまいますので、長い間那須野ヶ原は集落のない原野のままであったと伝えられています。

この原野を水田や牧草地に変える契機となったのは、日本三大疎水のひとつである那須疏水です。明治十八年、当時の栃木県令らの奔走により那須疎水の開削が国の直轄事業として採択され、極めて短期間に約一六㎞の水路を完成させたと記録されています。しかし、大正期には洪水などによる川筋の変動によって、水路の補修・復旧を必要とする事態が頻発しましたが、資材・労務の不足などにより抜本的な整備ができないまま終戦を迎えました。

戦後は、食料増産を求められるなか用水の確保が喫緊の課題となり、様々な働きかけを国に行った結果、一九六七（昭和四十二）年に国営那須野原開拓建設事業が着工されました。この事業は農業情勢の変化に伴い事業計画が変更されつつ、一九九五（平成七）年についに完了し、現在の那須の発展に大きく寄与することになったのでした。

さて、平成二十七年度の日本の食糧自給率は、カロリーベースで三九％、生産額ベースで六六％となっています（農林水産省HPより）。新興国を中心に食料の需要が急速に増加するなか、飼料用穀物などの大半を輸入に頼る我が国では、農業従事者は高齢化が進み、耕作放棄地が増加するなど、食料自給率の向上は容易い状況にはありません。生産性向上のためには、ＩＣＴの導入といったような最先端の取組みが必要ですが、灌漑施設や排水機場などの新設や維持・更新といった農業土木にかかる投資も継続していかなければなりません。先人たちが営々と築いてこられたこれらの施設は、かけがえのない財産であり、将来のためにも守り続けなければならないものであります。建設業に携わるものの一人として、また、出身地の開拓事業の大変さ、偉大さを肌で感じた者として、これからも日本の農業の発展のために協力していきたいと考えています。